



はじめに

2017（平成29）年3月31日、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の3つが同時に改訂（定）された。そのことを受けて、幼児教育を行うすべての施設においては、質の高い幼児教育を行うことが求められている。そのためには、各園での子どもの生活や遊びが豊かに展開され、そして、小学校教育へと円滑につながるようにする必要がある。では、その「豊か」とは、子どもたちにとってどのようなこととして考えればよいのだろうか。

幼稚園や保育所等は集団での教育・保育を行うところだが、その集団を形成する子どもたちに同じペースで、同じプロセスで、同じ結果が出るように指導するものではない。また、発達に必要な体験が効率よくスムーズに得られるように指導することでも、その体験を通した成果が目に見える形として表れるようにするものでもない。小学校につながることを目的にした準備教育でも、先取りをして入学後に困らないようにするためのものでもない。

子ども一人一人が、発達の道筋を自分なりのペースと納得の仕方で、しっかりと自分の足で踏み固めながら進んでいくことが重要である。その過程には、一見、停滞した状況になっていることもあるかもしれないが、保育者と子どもとが織り成す温かな信頼に満ちた関係性のなかで、互いに支え合い乗り越えていくことができれば、その活動や集団は質の高いものと評価できるのではないだろうか。

そのためには、保育者の深い幼児理解に基づいた保育の構想力や実践力が求められる。ときには、保育者の予想を超えた子どもの発想に出会うこともあるだろうが、そこでの子どもの見方・考え方や内面に潜む学びを探り、生かしながらともに教育環境を創造するよう努めなければならない。ここに、保育内容総論を学ぶ大きな目的があり、保育者の専門性が培われる。

こうしたことを踏まえ、本書は、保育の展開を考えるにあたり理解が必要な基本的な事項について、さらには、改訂（定）を通して、今後、保育内容を考えるための新たな視点について、その具体的な実践の在り方についてわかりやすく論じている。

第1部では、保育の原点に立ち返って基本を学ぶ。第1章では保育の基本とその内容について、第2章では変化する社会や学校教育改革の流れのなかで、幼児期の教育・保育に期待されていることを解説する。第3章は、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領における教育・保育の考え方、第4章は遊びを通した総合的な指導、第5章では幼児期の教育と小学校教育の接続について解説している。第6章では保育内容の変遷を歴史的な視点から学ぶ。

そして、第2部では保育における計画について学ぶ。第7章では幼児理解に基づく保育の展開、第8章では、子どもの主体性と保育者の指導とのバランスのとれた指導計画の作成について、第9章では指導計画作成の考え方や手順、第10章ではその評価や改善の在り方、第11章では園行事の考え方や指導について論じていく。

さらに、第3部では、保育の実践力を磨くうえで必要なこととして、第12章では環境の構成と教材の研究について、第13章では保育記録を書くことの意義と実践、第14章は障がいのある子どもの指導、第15章では模擬保育の実際、そして、第16章では、保育内容の現状と保育内容を見直すうえでの今後の課題について論じていく。

本書は、保育者養成校において、保育者をめざし学んでいる人に焦点を当てて編集しているが、同時に、幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂（定）を期に、保育内容の振り返りと改善の方向性についても言及している。改訂（定）の基本理念やその内容の理解を深めるうえでも活用されることを願っている。

2018年2月

編者を代表して 津金美智子